

正倉院聖語藏華嚴經探玄記古点と

大乘阿毗達磨雜集論古点について

小林芳規

一、はしがき

正倉院聖語藏の古訓点資料のうち、ここでは華嚴經探玄記卷第九・卷第十九の二巻と、大乘阿毗達磨雜集論卷第一・卷第十一・卷第十二・卷第十四・卷第十五の五巻の、二点について、それらに加えられた古訓点を中心に報告させて頂く。これらの経巻の調査は、昭和五十二年十月と昭和五十四年十月とに、正倉院事務所後藤四郎元所長・武部敏夫前所長を始めとする正倉院事務所の関係各位の格別の御高情により、遠藤嘉基博士の御世話を得て、その栄を賜ったものであり、ここに厚く御礼を申上げる次第である。

二、華嚴經探玄記卷第九・卷第十九の古訓点

華嚴經探玄記二十巻は、魏の法蔵の撰述に係り、旧訳華嚴經六十巻本の解釈をして華嚴宗の要義を述べたものである。聖語藏の本経は「第五類甲種写経第三三号」として登録されたもので、巻第九・巻第十・巻第十四・巻第十九の四巻を存するが、巻第十四は平安後期書写の別本であり、訓点もない。巻第十は墨点本である。巻第九と巻第十九との二巻に平安初期の訓点が施されている。ここではこの二巻の平安初期加点の訓点を取上げる。但し、訓点は両巻がそれぞれに異なるので、別々に述べることとし、巻第十九の訓点の方が詳密なので、巻第十九から説くことにする。

卷九、卷頭
カラ、卷末
3、卷末
版四

(一) 華嚴經探玄記卷第十九 一卷

華嚴經探玄記卷第十九は、卷子本装、奈良時代の写経で、料紙は褐色の穀紙かと認められ、墨界を施している。全巻裏打修補が施され、後補表紙に竹を立てるが紐はない。紙高二六・三糎、界高二二・八糎、界幅一・九糎程度、一行二十字前後、一紙二十八行を算する。但し巻首の第一紙十二行は鎌倉時代の補写である。奥書はないが、軸付補紙に応永十四

符疊	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
久		ら	ハ	ろ	ハ	示	太	た	う	ア
ハ				ろ						
リ	キ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
	々	リ		三	じ	ル	ニ	之	支	ア
				ニ	ニ			ら	す	
フイ		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
云		る	由	ム	不	又	ル	何	久	宇
		る		ム	ト			何	久	
トヒ	エ	レ	江	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	衣
人	鬼	しろ		女	乙	ギ	ス	世	介	衣
										え
リナ	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
や	字	呂	与	毛	尔	乃	止	十	己	イ
			与		尔					

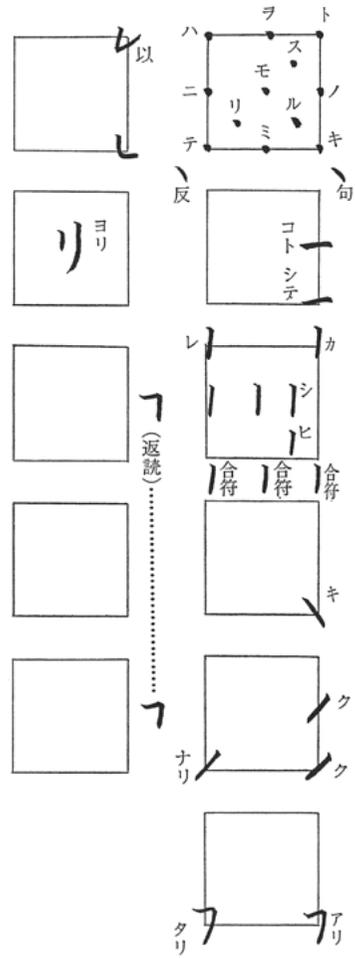
第一図 華嚴經探玄記卷第十九白点の仮名字体

年(二四〇七)の辨範の修補記が次下のようにある。「古本朽損之間加朱点修補表紙/奉返納御経蔵者也/応永十四季四月廿九日 辨範」。

この一卷には、白点と朱点・墨点とが施されている。このうち、白点が平安初期の加点である。朱点と墨点とは、降って応永十四年の加筆と認められ、朱点は句切点・合点に用いられ、墨点は仮名に用いられている。以下には、平安初期の白点について述べる。

白点は全巻に詳密に加えられてあり、仮名とヲコト点とによって、経文の漢文が訓読される。加點識語は無いが、仮名字体やヲコト点法から見て九世紀初頭の加点と認められる。白点の仮名字体は、第一図のように帰納せられる。全体に真仮名体が多くて平安初期の特徴を示し、中でも平安遷都十数年後の加点と見られ、少くとも天長年間(八二四―八三三)を降らないと考えられる。白点のヲコト点は、第二図のように帰納せられる。星点図が、左下隅から右回りにテ・ニ・ハ・ヲ・ト・ノ・キとなっていて、中田祝夫博士の分類による第三群点に属する点法である。これによれば、白点は、東大寺辺の華嚴関係僧の手に成ったものと推定せられる。

白点の加點状態で注意されるのは、漢字の右傍に「フ……」の形の返点を施しているために、傍訓はこれを避けて左傍に施すことが多いことである。白点は全巻を通じて一種類の一回の訓読を示している。



第二図 華嚴經探玄記卷第十九 白点のヨコト点図

に多く用いられ、体言や連体形に附いている。
 仏為撰生神。
 八相の如来周于法界
 四開一発一者探其隱
 五顯現一者露其躰状
 間投助詞「ヤ」は、
 從彼發一來下答來時之久
 のように、「ヒサンク」と「アル」との間に挿入
 されている。この例は、「ゴトキ」が連体形「ア
 ル」に直ちに接した用法でもある。助動詞「ナリ」「タリ」の古形として、
 解云 是則於已成之徳 不能了知現行之行亦不能説
 此約 第五行
 此長者具撰 因果行位法

以下、この白点から知られる、音韻・文法・訓法・語詞における国語史上注目すべき事象に触れる。(用例中、ヨコト点を平仮名で示し、仮名は現行の片仮名で示す。返点は私に施し、私の補説を括弧に包んで示す)

まず、音韻の上では、上代特殊仮名遣のうち「コ」の二類の別も認められないが、ア行の「エ」に「衣」を用いて、「得法」とある。ヤ行の「エ」の例が拾われないが、時代から見ても、両音の区別があったと考えられる。

文法では、助詞「イ」、文末用法の「ソ」、間投助詞「ヤ」、助動詞「ニアリ」「ナリ」の古形、「テアリ」「タリ」の古形、「マジ」、敬語の補助動詞「タブ」、「ミモト」の読添えが注目せられる。助詞「イ」は、

随其所欲等者称機説法也

七嚮忍菩薩等者七地得有中殊勝行

のように用いられ、主格に附いている。文末助詞「ソ」は、漢字の訓釈

のように、未だ融合しない形も行われている。「マジ」は次のように用いる。
 説慈悲不令奪命「メ」は本のまま)

敬語の補助動詞「タブ」は、
 二時一莊嚴具 下明仏納受 變成宝蓋

と用いられている。「タブ」は奈良時代から見られ、平安時代にも比較的夙い時期に多く見られるが、消息や会話文など口語性の強い場面に現れ易く、訓点としては珍しい。遠藤嘉基博士もこの古点の先の報告書において、このことを指摘していられる。「ミモト」は、「所」の訓として

古点本にその例を見るものであるが、この古点では、

四詣^て仏^の聞^く法^を

のように、読添えの敬語として用いている。

次に、訓法では、再読字の訓法、副詞等の呼応、人物を表す「者」の訓、例示の「等」の訓が注目せられる。再読字は、「当」が「マサニ」と訓まれるが、未だ再読表現になっていない。

依^て梵^に本^に云^は我^れ当^に云^は何^れ能^く知^る彼^の功^を徳^を能^く説^く彼^の法^を

下に「説き(テ)ム」と「ム」で呼応させている。

「寧」は「トモ」で呼応させ、「云」は「トイフ」で結び、「豈」は「ムヤ」で結んでいる。

苦^は薩^は寧^は起^る百^は千^は貪^は心^は不^は起^る不^は起^る一^は嗔^は等^は

解^て云^は是^は則^は於^に已^に成^る之^の徳^を不^は能^く了^る知^る現^に行^は之^の行^は亦^は不^は了^る

能^く説^く

我^れ豈^は能^く知^る無^は盡^は功^を徳^を藏^は廻^は向^は竟^は

人物を表す「者」は「ヒト」と訓じ、例示の「等」は「トノゴトキ」と訓ずる。

二^は変^は化^は実^は行^は者^は了^る知^る前^は人^は

次^は知^る水^は色^は時^は風^は等^は

語^は詞^はに^は、

但^は有^は詣^は敬^は申^は請^は

謂^は光^は觸^は得^は定^は

ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
	ラ	ハ	テ	ハ	ヤ	ナ	サ	カ	ア
	ラ			ハ					
キ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
	リ		ズ	ヒ	ニ		シ		イ
						チ			イ
	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
	ル		ム			ツ	ス	ク	ウ
エ	レ	江	メ	ハ	ネ	テ	セ	ケ	衣
	レ		メ	ハ		テ	セ	ケ	
ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
	ロ		モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
			モ						

第三図 華嚴経探玄記卷第九の仮名字体
(各欄の上段が白点、下段が古朱点)

(二) 華嚴経探玄記卷第九 一卷

華嚴経探玄記卷第九は、卷子本装、奈良時代の写経で体裁等は卷第十九に通ずる。但し法量が、紙高二八・二種、界高二二・四種、界幅一・八種、一行二十字前後、一紙三十一行を算する。

この一卷には、古朱点・白点と、新朱点・墨点とが施されている。このうち、古朱点と白点とが平安初期の加点である。新朱点と墨点とは、

の「申」^{トモ}「觸」^{フクヘ}の他、「三十億街巷」^{ソウジウ億街巷}「飲時調適」^{インジキ調適}「扱山阿尼」^{アツク山阿尼}「諦観不」^{テツカン不}「為将」^{シヤウ}「十重聖者」^{ジュウジュウ聖者}「隣次」^{リンジ}「宿願所求」^{シュクガン所求}「探其隱」^{タンキイン}「大衆」^{ダイシュウ}「帰心」^{キシン}「統末」^{トウマツ}「焼香起願」^{ヤウキウ起願}などがある。

威儀いぎ亦勝またかち 故拳こけん色身しきん

「イ」が、主格に附くだけでなく、第一例は連用格に附いている。

次に、訓法では、再読字の訓法、副詞の呼応、人物を表す「者」の訓が挙げられる。再読字は、「当」が「ベシ」「マサニ」と訓まれるが、未だ再読表現になっていない。

今此いま当あた於お成なり集あ方かた便べん

又欲また觀み其その智ち當あた觀み其その說せつ故拳こけん名身なみん以もつて表示ひょうじ示し耳みみ

但し、「須」に「くは」と「し」との訓点を施した例がある。

是衆このしゆ首うし皆みな須す為な衆しゆ作し所しよ充ちゆう作し

「須くは…須し」と再読したとも見られるが、返点の「三・三・一」「三・三・二・一」が左傍と右傍とに施されていることによると、二様の訓法が重なった結果と見る余地もある。副詞の「蓋」は「ナリ」で呼応している。

是なり一いつ蓋がい是世人このよじん疑うたが性せい常じやう辭じ

人物を表す「者」は「ヒト」と訓ずる。

示し余この者もの者もの淨じやう心しん

語詞には、

余この三さん積じく能のう如ごと法界ほふがい之の地ち智ち

辭ことば無な響きやう洗せん

の「如」「響」の他、「匠斧木縁」「停擁」「為則」「同類啓請率感猶漸」「遂衆心欲」「嫉者妬他過」「无所畏」な

どがある。

三、大乘阿毗達磨雜集論第十一・卷第十二・

卷第十四・卷第十五の古訓点(卷十四、卷頭カラー図版)
(4、卷末図版五)

大乘阿毗達磨雜集論十六卷は、無著菩薩の「大乘阿毗達磨集論」七卷の注釈であって、無著の集論を本論とし、これに師子覚の加えた釈論を、安慧等によって雑糅したもので、玄奘の訳に係る。聖語蔵の本経は、「第二類唐經第九号」として登録されたもので、卷第一・卷第十一・卷第十二・卷第十四・卷第十五の五卷を存している。このうち、卷第一は他四卷と書体・紙質等が異なり別本であり、白書の訓点もあるが、仮名・ヲト点共に少く一部に認められる程度であるので、ここでは、卷第十一・卷第十二・卷第十四・卷第十五の四卷の訓点について述べることにする。この四卷は、卷子本装、唐時代の写経で、料紙には黄褐色の麻紙を用い、墨界を施し、原表紙を有する。表紙には竹を立て、「東大寺」の方印があり、見返しに「馬道」と墨書している。新補軸を附す。紙高二六・五糎、界高一九・七糎、界幅一・七糎、一行十七字、一紙二十八行、一紙長四七・二糎を算する。

この四卷には、全卷に亘って白書の訓点が施されており、別に朱書の句切点がある。加點識語は無いが、九世紀初頭の加點と認められる。訓点の加點状況は、その發達初期の段階を反映して疎略であり、仮名が真仮名本位で、濁音専用仮名があり、ヲト点は線点・鉤点が未だ十分に

發達していない。又、仮名に上代特殊仮名遣のうち「コ」「ヨ」の二類の区別が認められることなどから見て、訓点資料の中でも最も古い時期に属する。春日政治博士は、成実論天長五年(八二八)点よりも三十年位前(延暦年間)に置いても無理は感じないとされている。

本経巻の訓点については、既に春日政治博士の高論「聖語藏本唐写阿毗達磨雜集論の古点について」(安藤教授還暦祝賀記念論文集所載。『古訓点の研究』再収)が公にされていて、よく全容を紹介され詳細な国語

符疊	フイ	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
とく	云	和	良良	や	万	彼	奈々	多々太	佐左	可カ	阿
保曾木とくく	トコ	キ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
	る	为	利理		羨未	比以	尔々	智知地	之志四	木寸丈義	伊伊尹己
	ノモ		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
	ウ		流舌類		无羊六	不		川	負	久九	乃
ミノ	トヒ	エ	レ	江	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	衣
了	人		し		目米	倍マ	根	豆	世七	氣家	う
キト	リア	ヲ	口	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
付	乃	乎雄	呂日	乙(甲)与夜	毛毛	保	乃	止と土	曾ソ十	乙(甲)古去具	枝

第六図 大乘阿毗達磨雜集論白点の仮名字体
(○印は濁音仮名)

学的考察がなされている。又、鈴木一男教授の「聖語藏御本唐写大乘阿毗達磨雜集論調査報告その一」(訓点語と訓点資料第二輯)には、巻第十の訓読文が公にされている。これらの御論に導かれつつ、今般の調査において、その諸事象を確認することが出来たが、更に新たに知り得た事象もあるので、ここに報告させて頂き、私の帰納し得た仮名字体とヲコト点図とを添えさせて頂くこととする。

先ず、仮名字体は、第六図のように帰納せられた。春日政治博士の御

調査に対して、更に「カ」(カ)、「ク」(キ)、「セ」(コ甲類)、「タ」(ズ、濁音仮名)、「ヤ」(ナ)、「ユ」(ル)などが新たに認められた。仮名の字体が真仮名本位であり、同じ音節を表すのに異なる字母を複用するものが多いのも、春日政治博士の指摘された通りである。新たに認められた仮名の中で、「タ」(ズ)と「ユ」(ル)とは他の訓点本に使用例の少ないものである。

この「タ」(ズ)に関連して、本経の白点に濁音を表す仮名が用いられていることが注目される。このことについては、春日政治博士が字音表記のために用いられるとして左の五例を挙げられた。(以下用例には真仮名を漢字で

示す。ヲコト点は平仮名で表し、私の補説は片仮名を括弧に包んで示す)

愛護阿〇具 (今回の調査は「阿具」、巻十四)

罍花儀 (「花儀」は「罍花」の字音を表す類音字、巻十五)

劬勞其有良有 (今回の調査は「具良有良」、巻十五)

沈没地无〇〇 (今回の調査も「地无」、巻十五)

度疑土木 (今回の調査も「土木」、巻十五)

しかし、字音表記だけでなく、和語についても濁音仮名が次のように用いられている。

辱波地(巻十二、上欄)

吹碎布木九太九(巻十五)

不出家(巻十五)

「波」(ズ)は、そういう例の一つであって、打消の助動詞「ズ」を表すのに用いられている。このように濁音仮名が用いられる音節がある一方で、「布」「ッ」「波」「比」のように清音にも濁音にも用いられる仮名もある。

踐躡布未柶无(巻十四、下欄) 悵悵伊多未可奈之布(巻十四)

曾可_レ豆(巻十二) 徒伊多_レ良尔(巻十二)

詰賣_レ波_レ目止布良尔(巻十二) 叫喚佐氣比夜波布(巻十四、下欄)

懼慮_{下於}毛_利(巻十四、下欄) 機弄和可_レ毛_多比豆(巻十二、上欄)

「己」の他に、新たに「古」の仮名も用いられていることが分った結果、上代特殊仮名遣の「コ」の甲類と乙類との区別があることが確認せられ

ることになった。

「コ甲類」^二慰_心(巻十二)

故_心(ラ)て

「コ乙類」^二故_心(巻十四)方_止(巻十四) 威己止_止ミ_止尔(巻十四)

四、上欄)

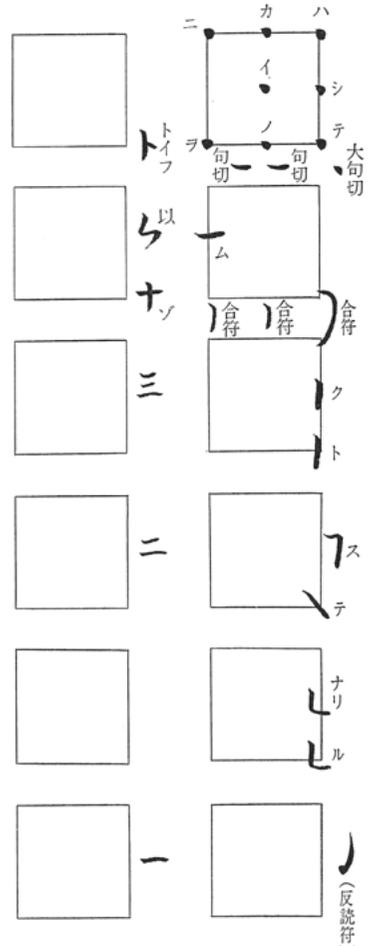
「コ」の甲類と乙類との区別は、東大寺諷誦文稿・西大寺本金光光明最勝王經古点など平安初期の他の訓点本にも見られるものがあるが、この大乘阿毗達磨雜集論には更に「ヨ」の甲類と乙類とを使い分けた例のあることを、春日政治博士が指摘せられた。

正見无由_与之(巻十四、下欄)

揚声_与叫喚佐氣比夜波布(巻十四、下欄)

今回の調査でも確認せられた。春日政治博士は「ヨは己に奈良朝末から混じてゐたやうであるが、偶々一部に遺つてゐた名残であるとも見られる」と説かれた。「コ」の甲類乙類の区別のこととは指摘されなかったが、「ヨ」に区別があるとすれば、「ヨ」に区別が存するのは自然であらう。

次に、ヲコト点は第七図のように帰納せられる。春日政治博士の帰納せられた図と比べて、星点図の右中が「シ」(春日博士は「ク」)、右下隅が「テ」(春日博士は「ト・テ」共用)であり、「ク」は縦線の右中、「ト」は縦線の右下隅で表されている。春日政治博士は、星点と縦線とを混同されたい。この他、新たに大句切点、右寄り合符・左寄り合符、「トイフ」の符号も認められた。ヲコト点法は、星点が左下から四



第七図 大乗阿毗達磨雜論 白点のヲコト点図

隅を右廻りにヲニハテとなる形式であつて、「恐らく興福寺などの法相

宗僧侶の加へたものらしい」と春日政治博士の説かれた通りである。

本經の訓読法について、音と訓とを並べ附けたものとして左の八例を挙げられた。(下の括弧内が今回の調査の例)

- 慳吝 理爾 乎志无(卷十二) (慳吝 理尔乎志无)
- 勇勵 レ尹 ツ止牟(卷十二) (勇勵 下欄 ツ止牟)
- 勞倦 ツ可レ有六 良有(卷十二) (勞倦 上欄 ツ可レ有六)
- 悲恨 伊可利有良未 己爾(卷十四) (悲恨 下欄 己尔)
- 悵悵 伊タ未可奈之布 下音良有(卷十四) (悵悵 伊多未可奈之布 下音良有)
- 稼穡 家 奈へ奈流止 未爾奈利奴流止(卷十五) (稼穡 下欄 奈へ奈流止支)
- 劬勞 其有良有 ツ可レ〇〇(卷十五) (劬勞 上欄 未尔奈利奴流止支)
- 青瘡 於 阿乎未ツ志米流(卷十五) (青瘡 上欄 阿乎未ツ志米流頭)

た。音韻について、春日政治博士の取上げられた、「トドモル」「ホソグ」

「モタソブ」は、それぞれ、

二事 无有滞礙(卷十二) 无滞 故(卷十四)

慈悲心 遮防 一切の損害・逼迫悩乱(下欄) 保曾木(卷十二)

機弄(上欄)和可ツ利毛タ十比豆(卷十二) 「タ」の下の仮名を春日博士は不明

とされたが「十」(ソ)と見られる)

とあつて説かれる通りである。

字音の類音字表記のものには、春日政治博士の挙げられた他に、左の諸例も認められた。

- 善巧(卷十二) 殷重(卷十一) 引殖(卷十二) 獅子吼(上欄)口(卷十)
 - 四) 帰仰(下欄)向(卷十四) 違毀(上欄)鬼(卷十五)
- 又、俗読みとされる「罌礙(上欄)花儀」(卷十五)、頭子音の錯誤とされる

この他にも、左の例がある。
 侵損(上欄)乎可志音心(卷十一)
 奉保世美波レ多十
 臙脹 (卷十五)
 春日政治博士が、「訓読に特に釈」と附記された例とせられたものは、原本を見ると、
 顯彰(下欄)阿良波那類(卷十四)

「怯弱（上欄）可不美惡」（卷十五）（春日博士が「可布美惡」卷十四とされたのは誤）、拗音のイア表記とされる「配釈波巨志久久 訓阿互し説」（卷十四）、原音に忠実な発音とされる「粟（下欄）奴阿尔」（卷十四）も説かれた通りである。

次に、語彙で取上げられた、「稼穡」の「奈へ奈流止 未爾奈利奴流止」は、「止」の下にそれぞれもう一字「支」の仮名があつて、

土用果者謂稼穡等（下欄）奈へ奈流止支
（上欄）未爾奈利奴流止支（卷十五）

のように「ナヘナルトキ、ミニナリヌルトキ」と読むべきものであった。附訓した文字には、春日政治博士の挙げられた他に、左の諸例も拾われる。

- 相称（上欄）可奈（ヒ）（卷十一） 安心（下欄）於木互（卷十一） 堪（下欄）多倍
 - （卷十一） 熾（佐利）火（卷十二） 慰他心（上欄）や頁目互（卷十二） 鷹空（卷十二） 毀皆（上欄）尊之りや布流（卷十二） 御衆（卷十四） 邪径（卷十四）
 - （四） 大笑（卷十四） 斂心（下欄）平佐幸（卷十四） 略有四种（卷十四）
 - 速疾神通（下欄）止木（卷十四） 令処善法（卷十四） 摧伏（上欄）不之卷
 - 十五） 不毀（上欄）や布良奴（卷十五） 全攝（卷十五） 識蘊相故（卷十五）
- 春日政治博士が「最後に語法上注意すべき二三」として指摘された、動詞「オソリ」、副詞「シカク」「コトゴトクニ」について、原漢文に加点された形で例を挙げておく。
- 一 无懼（下欄）念比波（カ）利下於毛（ヘ）（卷十四）
 - 二 於所問順尔而（下欄）志可久尔順豆（卷十五）

於所問不尔而答（卷十五）
 威（上欄）己止、九尔（卷十四）

又、助詞イ、文末の助詞ソの例を補つておく。

諸菩薩隨言取義不如正理 思（上欄）折法故（卷十二）
 初（一）數増（二）以成（三）十教（卷十一）
 謂於施等勸勵讚美隨喜慶悅（卷十二）

第二句謂断見者（卷十五）

「況」が「ヲハ」で呼応した文例は次のようである。

若（上欄）必（二）蕪（一）成就（一） 六法尚能口風吹（下欄） 碎（上欄） 高（上欄）廣大（上欄）
 雪（上欄） 山王況无明死屍（卷十五）

右の文中の「風し」を春日博士は「風ヲモチテ」と読まれたが、星点の右中の「し」である。従つて副助詞「し」の例となり、しかも「フキクダク」と終止形で呼応した古用法を示している。

副詞の呼応では、「唯」が「ノミ」と呼応して訓読されていて、これも古訓法を示している。

唯有六（上欄） 不増不減（卷十一）
 此唯有名（卷十四）

再読字は、左のように未だ二度読みとなつていず、平安初期の一般的な訓法を示している。

願我当證（上欄） 阿耨多羅三藐三菩提（卷十二）
 四資糧未（上欄） 滿諸苾芻（卷十五）

最後に、和訓を表すのに、音仮名の他に表意の漢字をも交え用いたものが多いため左に例示する。

二 无懼^{於ッ利}慮^一 (下欄) 念比波(カ)利(念ヒハカリ) (卷十四)

二 如応配^{下欄}積波^{上欄}已志阿久 訓阿互^レ説(訓アテ、説) (卷十四)

二 暁^{ニテ}愚情^一 (下欄) 阿可志互説(アカシテ説) (卷十五)

於所問^性順尔而^性 (下欄) 志可久尔順互(シカクニ順テヒ) (卷十五)

青瘖^於想(上欄) 阿乎未^於志米流頭(アラミッシメル頭) (卷十五)

これらの他にも、類例が少くはないのである。

(広島大学教授)